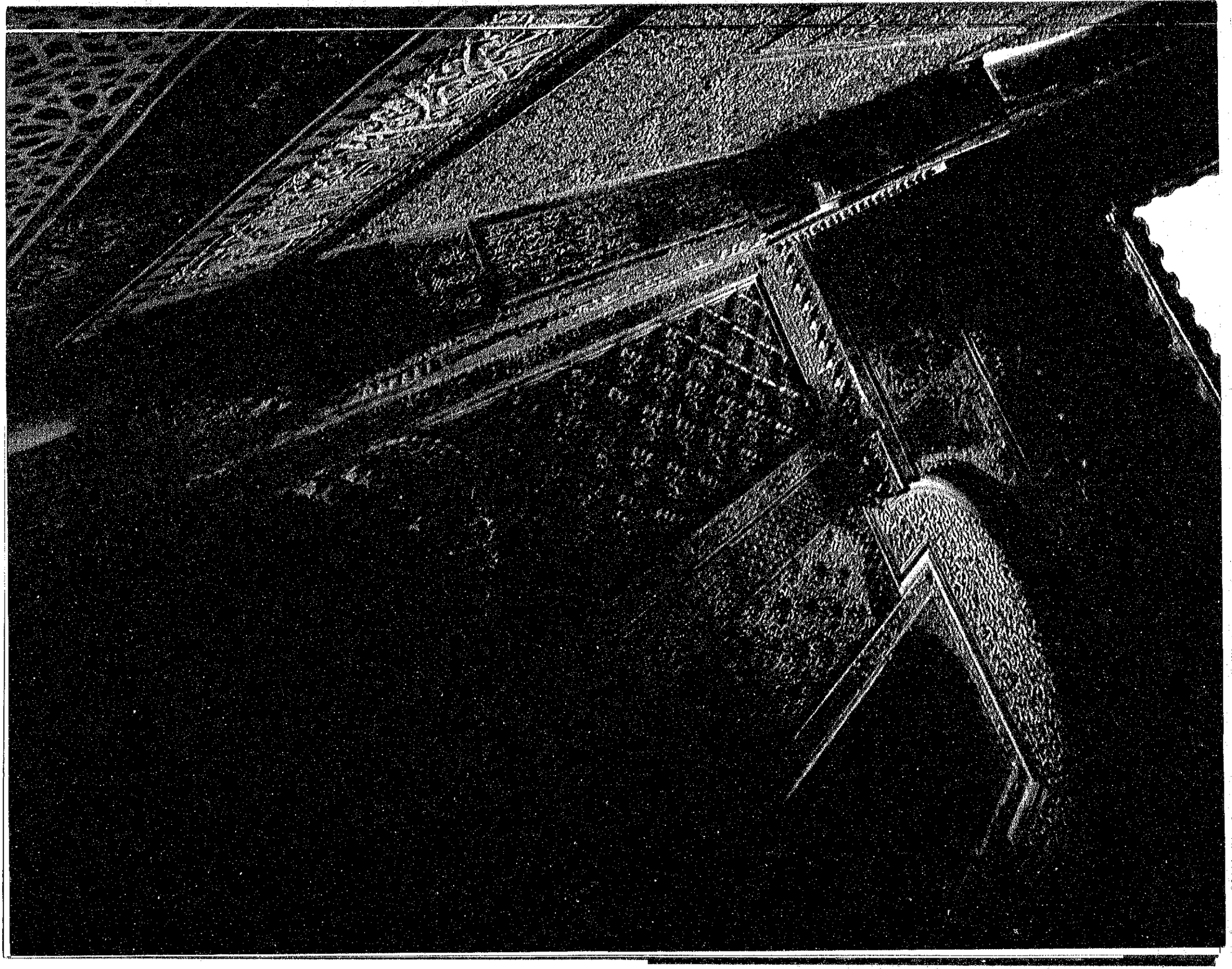
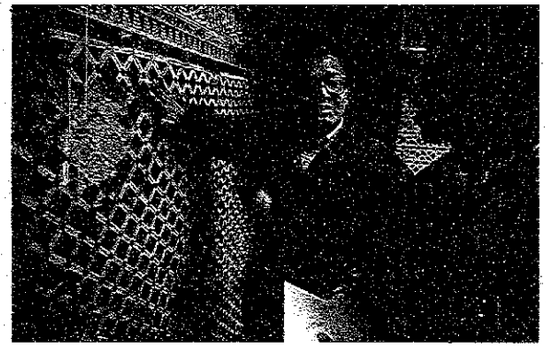
遺跡修復という仕事。

モロッコの旧市街、メディナにある中世イスラム建築物の保存にユネスコが乗り出した
という話を聞いたのは10年以上も前のことだったと思う。最大の難点は、遺跡のあるメディナが膨大な人口の密集する生活圏であって、
いわば"生きた中世"の状態であるからだといわれてきた。だが修復を目的に参加した協力隊員たちの悩みは、
活動しようにもその軍資金がモロッコ側にないということであった。

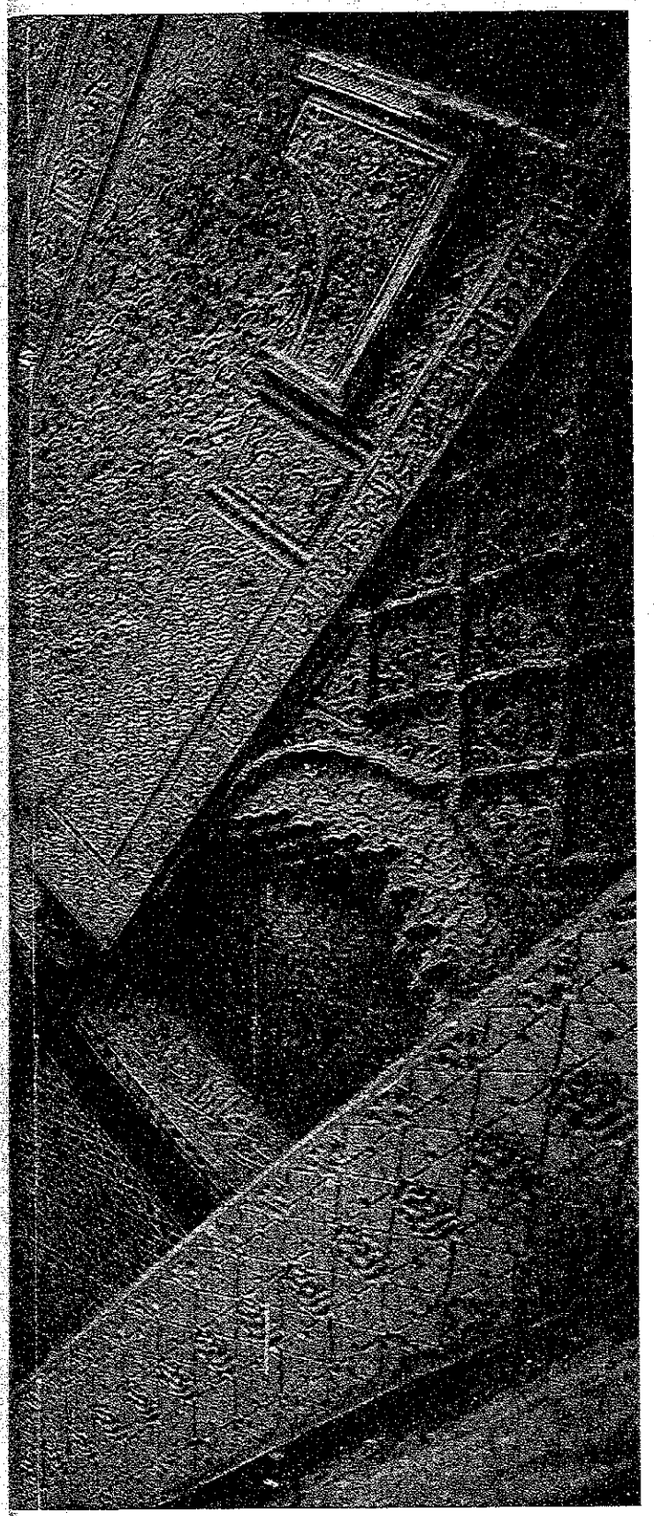
[MOROCCO]

14世紀に建てられたアタリン：メデルサ。
コーランを教える学校であった。
北アフリカの回教徒がスペインに攻め入り
キリスト教文化と融合して
スペイン・ムーア文化を創造した。
ムーア文化はモロッコに逆流して広がっていった。
この建築物は、そうしてもたらされたムーア建築の
最高傑作のひとつであろう。
優雅で清楚な空間を有するという点では、
日本の古建築と相通じるものがある。
人間であふれるメディナの
喧騒のなかにあるだけに、
この静まり返った空間がいっそう魅だつ





(上)図面作製のために、アタリン・メデルサの
測量を行う奥津隊員と助手たち。
モロッコではこのような歴史的建造物の図面は
まったく残されていない。
今後の資料としても正確な図面を作製しておく必要がある。
現在の建築技術のレベルという点では
日本と比べると、相当の遅れがあるという。
日本でなら数十枚の図面が必要なところを、たった一枚で、
細部にこだわることなく
一軒の家を建ててしまうのだという。
(左)はがれ落ちたアタリン・メデルサの壁面モザイクを調べる



モロッコで目覚めた「豊かさ」の基準。

モロッコ中部の都市フェズの旧市街（メディナ）。日本ではカスバという呼び名の方が一般的だ。ここは昔の都市であり、モロッコ文化発祥の地でもある。狭い路地が迷路のように入り乱れた中世以来変わらぬ超過密市で、千年近い時間のなかで人間のあらゆる尺度が組み合わされ重ねられていって、まるで幾塚のように出来上がってしまった街である。周囲10キロ余の古めかしい城壁のなかには25万人がひしめいており、丘から見下したその眺めは、『中世の缶詰』といった趣きがある。

唯一の交通手段はロバである。絹の織物、ゴミクズ、はてはテレビや冷蔵庫までがロバの背に縛りつけられ、行き交う群衆をかき分けながら運ばれていく。厳粛なる葬列と、血の滴る牛肉を運ぶロバがハチ合わせになって往生している場面に出くわしたこともある。

排気ガスのないかわりにロバの糞が臭っていたり、壁という壁は、体温がしみこんでいるのではないかと思えるほどに手アカで黒光りしており、とにかく人間臭い街である。かと思うと、小便臭い路地奥の重い扉をくぐると、糸杉やナツメヤシが日陰を落とすアンダルシア風の庭園があって、静寂のなか、大理石の水盤に落ちるピタピタという水音だけが響いている空間が隠されていたりもする。

建築隊員、奥津雅和の案内で喧噪のメディナを行く。ときどき顔見知りと出会うたびに奥津が挨拶を交わす。「シノワ！ シノワ（中国人）！」と子供たちがからかう声。東洋人に対する侮蔑と多少の親しみをこめた挨拶だ。

だがこうして歩いていていつもと違っていることに気がついた。それはハエよりもしつこいポン引きや、ガイドたちがまとわりついて来ないことだ。それは奥津と同行しているからであった。人々は奥津をヨソ者ではない、メディナの同じ生活者として認めているのである。他の隊員も言っていた。モロッコ人は仲間として受入れると大変優しいし、困ったことが起これば必ず助けてくれる、と。

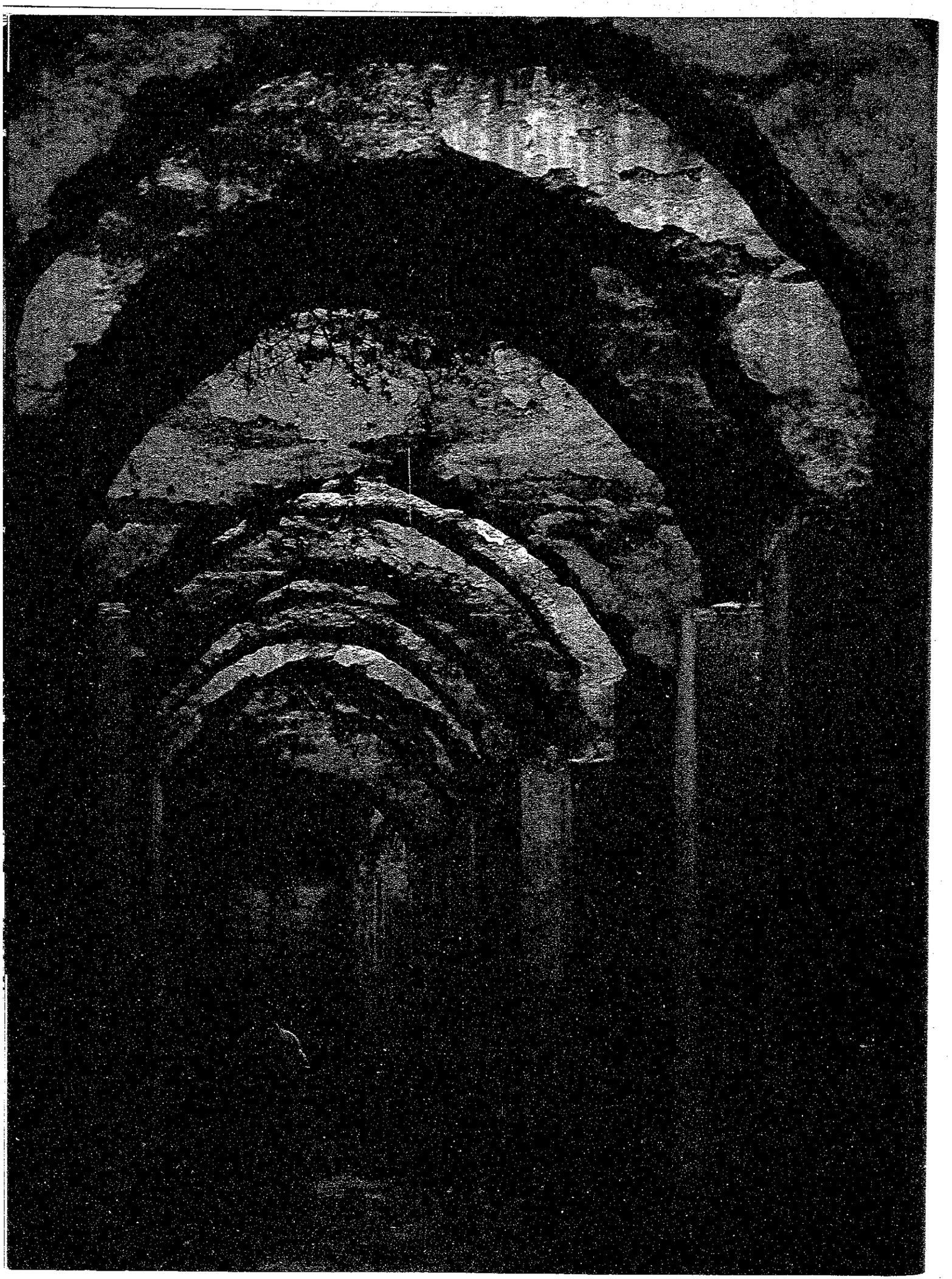
メディナは奥津にとって仕事場である。彼の配属先はフェズの文化財管理局、実はメディナ全体が文化財なのだ。現在に生きる中世の街のなかには、崩れかけたモスクがあり、昔の大商人が贅を尽して建てた屋敷の幾つかは、無人のまま鴉の巣となっていたり貧民たちが占拠してスラム化しているところもある。

エキゾチックで清楚なイスラム空間の再現！ 日本でのあまり情緒があるとはいえない、コンクリートやプラスチック、ガラスの組合わせに多忙を極めていた建築技術者にとって魅力的な誘いには違いなかった。だが来てみると、モロッコ側の受入れ体制は充分とはいえない状態であった。他の建築隊員、メクネスの木村一雄、ラバトの今村文明にとっても状況は同じであった。修復をしようにもモロッコ側には肝心の予算がなく仕事にならない。それに技術を伝えるべきカウンター・パートもいない。そのうえにわか仕立てのフランス語では感情表現もままならない。

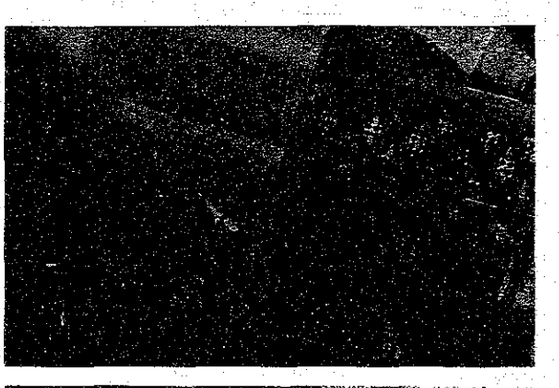
毎日出勤してきて、茶を飲みながら際限なく談笑にふけっている同僚を見ていて焦燥感に駆られ……日本出発の折、途上国へ行くことの人生のムダを指摘されて不愉快にさせられた元同僚を思い出し、自己嫌悪に陥ったこともあった、と木村も言っていた。この国の時間の流れ方になじめず、イラ立った体験はみな等しくもっているようだ。そんななかから、「こんなに時がゆっくり流れるなかで暮らせるなら幸せではないか」（木村一雄）。「モロッコの男たちのように日がな一日中、街頭カフェーにボケーと座って、行き交うロバや男たちをただ眺めていることの快適さを感じるようになった」（奥津雅和）。というように彼らなりのモロッコ再発見にめざめてゆく。

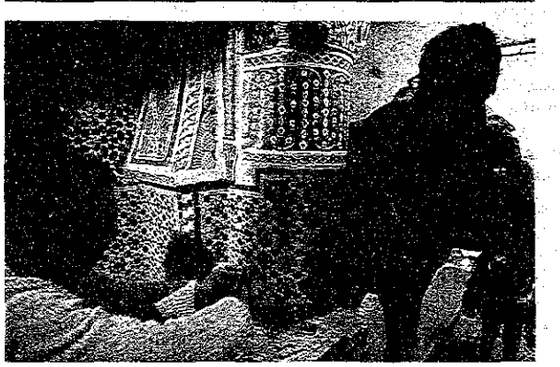
建築隊員たちはいま、遺跡を測量し、モロッコ人には出来ない精密な図面作製に精出している。日本でこれほど時間をかけて書いたことはなかったという。「10年、20年後に現実のものになるならそれでいい」（木村一雄）とも言う。滞在が3年目となり、今ではモロッコの時間の流れ方にすっかり溶けこんでしまったという木村は、日本に研修に行ってきたあるモロッコ人から突きつけられた言葉にうなずくことができるという。〝日本人はモロッコ人よりも精神的に貧しい〟とそのモロッコ人は指摘したという。ただ忙しく働きに働いて、いったいなんのために生きているのか、とそのモロッコ人は日本に問いかけていた。

20年前に私が初めて訪れた時と比べても、モロッコはほとんど変わってはいない。ここに流れているのは〝中世〟の時間だ。その中に身を置いてみると、息切れしかけてそれでもやみくもに突走っている日本がよくみえる。



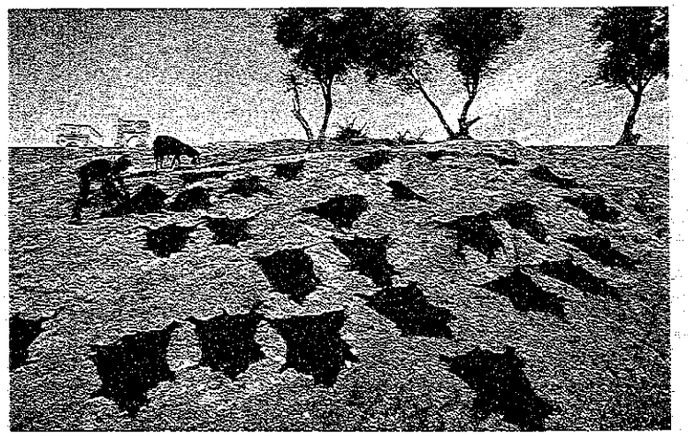
（上）ラバトに勤める今村隊員と、彼が制作した
ラバトのカスバ（城塞都市）の模型。
他の建築部員同様に予算上の問題から
当初考えていたような仕事がなく、
"何か残せる仕事、日本人が残していった仕事として
モロッコに置いていける仕事"をと考え、
文化財に指定されているカスバの模型制作を思いたった。
全体の実測図をつくり写真撮影、
材料捜しといった手間のかかる仕事が重なり、
完成までに10カ月を要した。
（右上）崩れかけた城門の復元図作製のために
写真を使ってトレースしていく。
（右下）モザイクで美しく飾られた
モロッコ独特の水場の修復をする職人と、語らう奥津隊員。
モザイクを一枚ずつ貼りつけていく気長な作業である。
（左ページ）メクネスのヘリと呼ばれる遺跡を見て回る木村隊員。
17世紀に建てられたこの建物は昔の穀物倉庫跡。
屋根が地震で落ちてしまい、アーチ型の
柱だけが残った

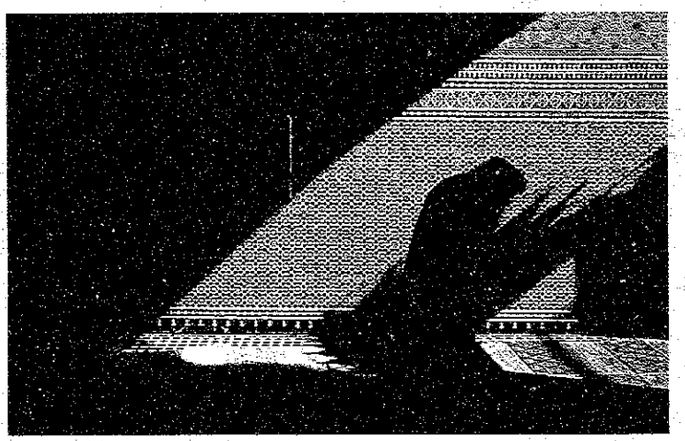


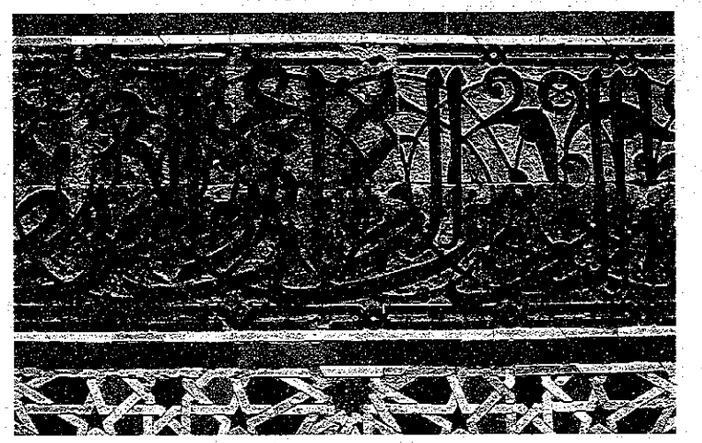


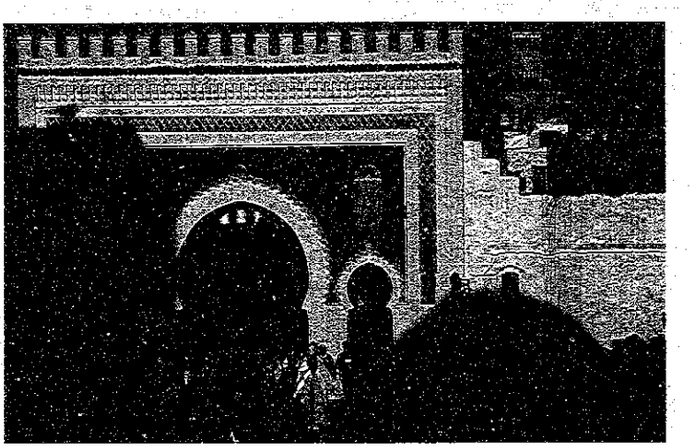
派遣職種●建築
旧市街（メディナ）内にある歴史的建造物の修復保存が主な仕事。
メディナは、首都のラバトをはじめ、
フェズ、メクネス、マラケシュなどの古都にあって、
中世以来変わらぬたたずまいを残している。
現在、隊員の主な仕事は、
イスラム建築物の精密な実測ならびに図面作製等である
モロッコ●人口2331万人（87年）首都ラバト。
立憲君主制をとっており、元首は国王M・ハッサン２世。
公用語はアラビア語。住民はアラブ系ベルベル族が99%を占める。
宗教はイスラム教スンニ派が99%。
主な産業は絨毯、皮革製品、観光など

(左上→下)宗教行事のために張られたテントの中で休憩する長老。
フェズ、メディナの青空市。
背後にメディナを取巻いている城壁が見える。
フェズの染色工房。見た眼は美しいが、
一帯は猛烈な腐臭がたちこめている。
(右上→下)フェズ、メディナの通り。狭い道は常におびただしい群衆でごった返している。
フェズの創始者、ムーレイ・イドリス廟の外壁。15世紀に建造された。
広場の屋台でハリーラ（豆入りスープ）を売る女性。
女性が飲食物を売っている光景は珍しい









(左上→下)染めた毛皮を天日で乾燥させる。
皮製品はモロッコの特産品である。
西日の差しこむモスクのなかの回廊を、
礼拝にきた老人が歩いていく
広場の屋台食堂。断食月間の
夕暮れどき、人々は食事解禁の合図を待っている
(右上→下)マラケシュにあるジェマ・エル・フナ広場。
大道芸人や屋台があって一日中にぎわっている。
メクネスにあるブー・イナニア・メデルサ壁面装飾。
フェズのメディナ西入口にあるバブ・ブー・ジェルード門。
1913年に古い様式を模して建造されたもの

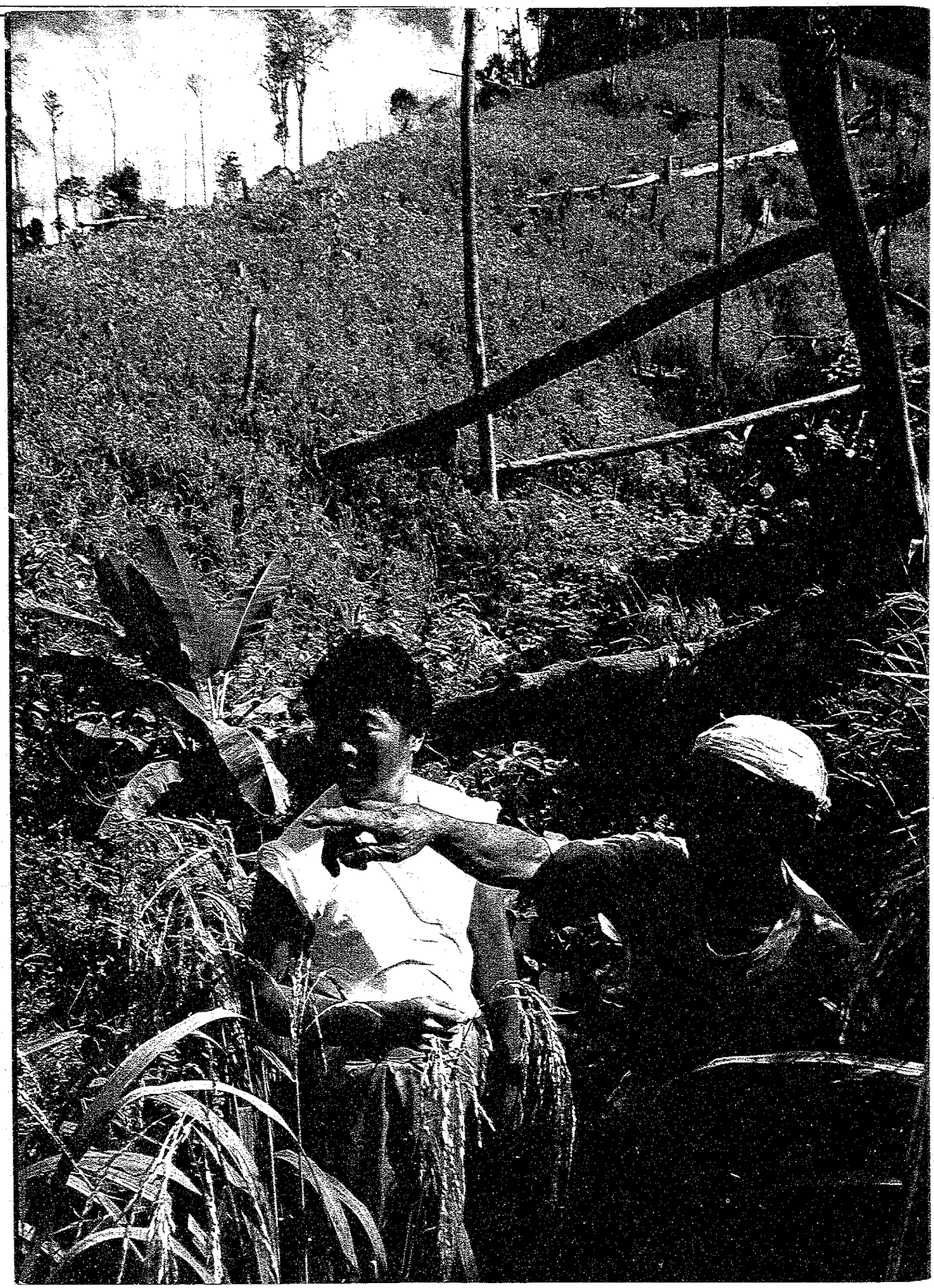
原生林のなかで、森林害虫であるシロアリの調査をする安細隊員。
日本にいた当時、ボルネオといえば
果てしなく広がるジャングルばかりの島と思っていた。
そのジャングルが絶滅寸前にある現実を
自分の目で確かめて衝撃をうけた。
彼が赴任してきた3年前には、
森林伐採の深刻さがほとクローズ・アップされていたわけではなかった。

[MALAYSIA]

あと5年で、サバ州の原生林は消滅する?!

いま熱帯雨林の危機が叫ばれている。それは熱帯雨林こそは地球上もっともデリケートな地域で、
その消滅は地球環境にとって取り返しのつかない影響を及ぼすことが科学データとして提示されるようになってきたからだ。
マレイシア、サバ州、豊かだった原生林は切り払われ、あと5年後には消滅するといわれている。
財源の大半を森林伐採に使ってきた同州にとって、林業以後の展望は開けていない。
その木材の大半を消費してきたのはいうまでもなく、わが日本である。
伐採はサバから隣りのサラワク州へと移りつつある。
急速に消滅していく熱帯雨林の片隅で、協力隊員たちが地道に活動を続けている。
森林保全から森林依存脱却を焦点とした農業改革まで職種は多岐にわたっている。

熱帯雨林のかたすみで。

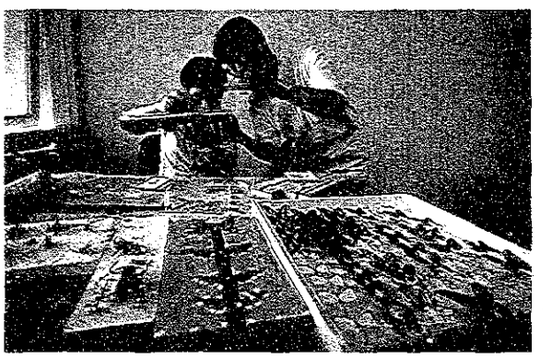


森林破壊の現場。

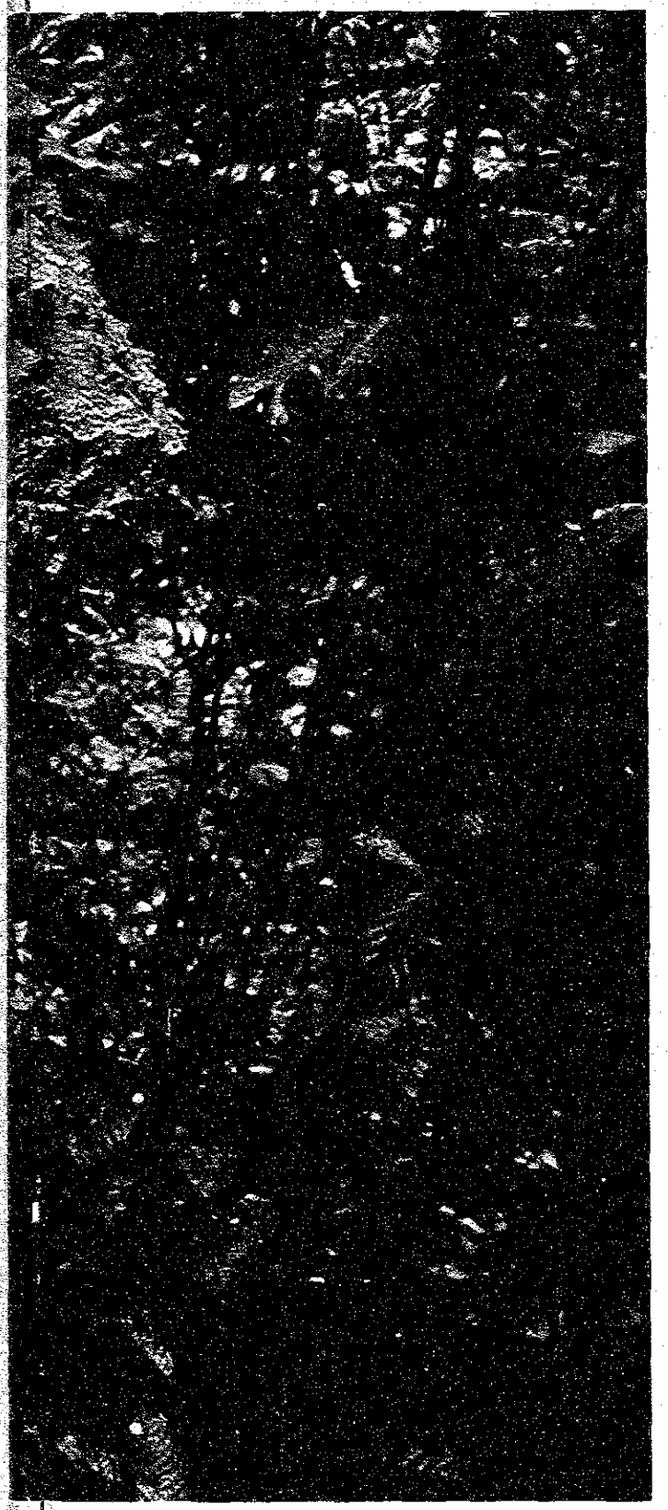
(右)伐採によって住処を追われるオランウータン。
一本の巨木を倒すことによって、
百年以上にもわたって生き続けてきた
森の生態系を根底から破壊することになる。
(上)伐採そのものよりもその木を
搬出するためのルートを開くことによって、
森は図り知れない打撃をうける。
飛行機から見下すと、その道路網が
森の奥深くへと枝わかれしながら
張り巡らされている様子が一目瞭然だ。
丸太の輸出から、州内で製材品として加工し、
輸出する傾向が近年急増しつつある。
広大な製材所のなかでは、
製材したあとのクズ材が山と積まれ、
四六時中燃やされている。

焼き畑という伝統的農業の見直しが急務。

(左)森林破壊のもうひとつの元凶は
伝統的な焼畑農法である。
焼畑は5年程度の周期で山を焼き、
その灰を肥料として陸稲を栽培する。
協力隊がサバ州で進めている村落開発プロジェクトは、
森林依存経済から脱却した農業自立をめざすものである。
焼畑から、より生産性の高い水稲耕作への
移行、定着を押し進めようとしている。
写真は、食用作物の菅原隊員と焼畑農民。
陸稲から水稲への切りかえを説得しようと試みるが、
農民たちはしばしば、水稲よりも陸稲で収穫した米の味が
自分たちの口に合うといって渋るという



森は生きている。



(上)立木に付いたシロアリの巣を調査する生態学の安細隊員。
こうなってしまうと木は内部を食い荒されて枯れてしまう。
だが森林の生態系にとって、
倒木を分解して土にかえすシロアリの存在は欠かすことができない。
(左)収集したシロアリのサンプル。
昆虫の標本づくりを指導する安細隊員。
森は生命にあふれている。
新種が次々に発見される一方で、
急激に起こった生態系の破壊によって、
人間に発見される以前に地上から姿を消してしまっている種も
あるに違いない。安細隊員が配属されてる森林研究所には
膨大な標本が蒐集されているが、
スタッフ不足から分類整理は遅れている

マレイシア、サバ州。ボルネオ島東北部の町、サンダカンに近い保護原生林。薄暗い森のなかを、一本の踏み分け道を進んでいく。分け入る隙もないくらい植物が密生しているのかと思っていたら、光の届かぬ地表には、けっこう隙間があったのは意外だった。落葉や枯枝がびっしりと敷きつめられた地表に、ところどころ木洩れ陽が鋭いスポットライトとなって射しこんでいる。無風。暗い森の底で汗が滴り落ちる。暑いというよりも、旺盛な生命力が濃密な湿気を発散しながら八方からグイグイ迫ってくるという感じだ。からみ合って幹を締めあげにかかっている太いカヅラ。梢に絢爛と咲きほこる蘭。

降り注ぐ蟬しぐれ。正体の知れぬ鳥の声。そして様々な生命の相のはるか頭上に、ドーンとそびえる巨木の梢が地上50メートルの高さから低い木々を守るかのように広く枝を張っている。何百年という時間をかけて生命と生命がせめぎ合い、淘汰されたあげくに巨大かつ精緻なひとつの生命体となって、森が息づいている。

こんな神秘に満ちた森のなかを、虫や蝶を捜しながら歩き回ってそれが仕事になるとしたら……しかもここは、いまだに新種が続々と発見されている、世界でもっとも奥深い森のひとつなのである。

「こんなに仕事を楽しんでいていいのかと、ふっと思うことがあるんですよ。協力隊に応募したときは苦労を覚悟していたんですがねえ。汗まみれで働いている他の隊員には申し訳ないような毎日ですよね」

虫捕りの七ッ道具を持って森を歩きながら安細元啓（26歳）が苦笑する。昆虫少年であった安細にとっては、熱帯雨林の虫たちの生態調査というこの仕事はそのまま少年期の夢の延長であった。任期を延長して滞在は3年目に入っている。大学卒業後、協力隊に入るまでの一年間は、あまり面白くもない害虫駆除の仕事をやっていたのだった。帰国後どんな仕事につくにせよ、このあとの社会復帰が大変でしょうと笑う。安細にとって一番印象深い体験は、夜の森でのひかりきのことの出会いであったという。一面の落ち葉に付着した菌が鮮かに光を発していて、懐中電灯を消すとまるで地上の星空のようにちりばめられていた。そして頭上を仰ぐと、梢越しには本物の星々が煌いていた。

安細と同じ森林研究所で木材の組成などを調べている山田信夫（25歳）も〝神秘的で幻想的な熱帯雨林の生命力〟に魅了されていた。

原生林に隣接する、オランウータンのリハビリセンターに勤める獣医師、北浦賢次（29歳）は、すでに滞在4年目に入っている。森林伐採によって森を追われ、あるいは人に傷つけられたオランウータンを治療し、育て、森に帰す仕事に従事する北浦にとっては、残された原生林だけがオランウータンを守る最後の砦であった。

サバ州での森林伐採のピークは、1980年代前半であった。残された森林は少なく、このペースでいけばあと5年後にはほとんどの原生林は消滅してしまう運命にある。いうまでもなく、木材のほとんどは日本に運ばれ消費された。森林伐採の現場はサバ州から隣りのサラワク州に移っており、サンダカンの町に駐在していた日本商社員たちの多くもそちらに移ってしまった。

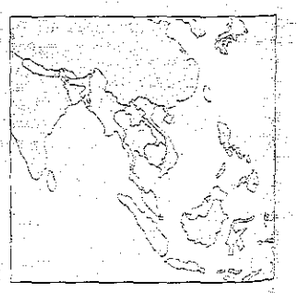
サンダカンの町を見下す丘の一画に日本人墓地がある。明治から昭和初期にかけて九州の天草地方から出稼ぎに来た末に、この地で一生を終えた〝唐ゆきさん〟たちの墓だ。唐ゆきさんのあとに日本軍がこの島にも進駐してきた。そして高度成長期の大量消費の日本を背負って、木材を買い尽し去っていった商社員たち。いま残された保護林の片隅で、ささやかな活動を続けている協力隊員たち……というように辿っていけば、これもまた赤道直下のひとつの島を巡る日本の近現代史の投影そのものといえる。

オランウータン

森の人の、もの言わぬ証言。

(左)森の伐採によって住処を失い、
親からはぐれたり、傷つけられたオランウータンを、
リハビリして森に帰すのが獣医師、北浦隊員の仕事だ。
原生林のなか、梢に組んだプラットホームで
エサを与える北浦隊員とスタッフ。
(上)病弱な子供の治療。
北浦隊員が在任中の3年と2カ月間に45頭が持ちこまれ、
病気やケガで死んだ14頭をのぞいて
他はリハビリに成功して森に帰した。
当初資料等もまったく無かったために
診察には相当苦労したという

派遣職種●森林保護、その他
森林伐採の進行という状況のなかでこれまでに紹介した
3人の隊員以外に、伐採による土壌流出、
雨量観測等を通じて森林保護に関するデータ集積を
主な仕事とする、森林天水学の鎌田篤美隊員、
木材化学研究に従事する林産加工の山田信夫隊員がいる。
2人ともサバ州森林局、森林研究所に所属している
マレイシア●人口1636万人(87年)首都クアラルンプール。
立憲君主制で、元首はスルタン、国王アズラン・シャー。
公用語はマレー語。住民はマレー人59%、中国人32%、
インド人9%。宗教はイスラム教、
ヒンズー教、仏教、儒教、道教、伝統宗教



COLUMN

隊員機関誌から PART 2

●勘違い

毎年9月には、アトラス山中の小村〝イミルシル〟で〝花嫁まつり〟なるものが開かれる。テレビなどでも宣伝され、1年に1回、ここの小さな村は、人、人、人で埋まるのである。

モロッコの南部に住む〝A隊員〟も、昨年このまつりを見物してきたのであった。そのとき、彼はあるひとつのベルベル語を覚えた。〝アオラ、アオラ〟である。(フランス語ではVien、モロッコ語でアジィ)。

今年になってA隊員は、モロッコ北部を旅行した。白っぽいベルベル人の本拠である。彼は自分の任地に戻ってきて他の隊員に旅の話をした。

「いやあ、さすがに北はベルベルの国ですね。大きな町中でも、〝アオラ、アオラ〟ですからねえ」

それを聞いていたのは、数人の隊員であるが、B隊員はどうもしっくりこない。いくらベルベル人が多いとはいえ、そんな町中でベルベル語が聞けるであろうか。彼は他の隊員にも聞いてみた。しかし、誰に聞いてもそんなものかなあ、というあいまいな答しかかえってこなかった。

それからしばらくして、B隊員もスペインの任国外旅行へ行ってきた。そしてあるときふと、あの問題を思い出したのであった。

「なぁーんだ、〝アオラ、アオラ〟ってベルベル語じゃなく、〝オラー、オラー〟とスペイン語のあいさつをしていたんじゃないか」

いやはや、勘違いはどこにでもあるものである。

匿名希望（モロッコ）

●心のこり

早いもので、もう2年の任期も過ぎてしまう。来た直後は暑さにまいっていたけれど、そのうち慣れ、いつのまにか帰る時期になっていた。

アフリカの生活などどんなものか想像もつかないままニジェールに来て、多くのものを見て、いろいろなことを知った。

Mademoiselleの故か、調子良く相手に合わせる性格のせいか、ニジェール人がほんとに人なっこいためか、職場ではあちこちに知り合いができ、楽しく過ごすことができた。結婚式やBaptême(割礼の祭り)にもよくよばれた。

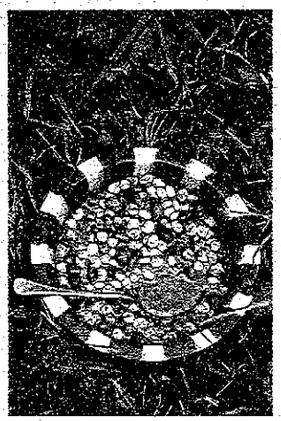
借金の申し込みには最後まで慣れることができなかった。私の家に来ると言うので、外出もせずに待っていて、来ないということもしばしばで、そのうちあまりあてにしなくなった。

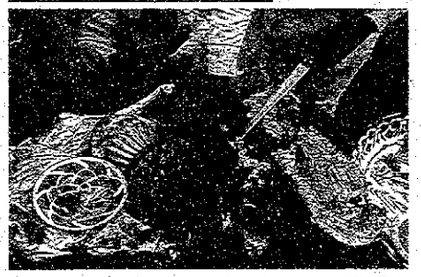
ニジェール人と日本人のギャップはかなりあり、いまだにニジェール人の行動は予測がつかない。でも、そこがおもしろい所だと思う。まだまだニジェールについて知らないことも多い。今から思うと、自分でももう少しニジェール料理に挑戦してみればよかった。もっぱらごちそうになってばかりで、自分で作ってまで食べようとは思わなかったのだけど、あのスパイスの組み合わせ方はなかなか難しい。1、2度作ってうまくいかなかったので、それっきりになってしまった。

今、帰国の準備をしていて、私が残していくものは、何から何まで、ニジェール人が持っていってくれるのにはとても助かる。捨てるつもりでいた色あせたTシャツとか、壊れた時計とか、かかとのすり切れたサンダルとか、みんな喜んで持っていってくれる。すっかり片付いて、お礼まで言われてありがたいことだけど、「まだ何かないの？」と聞いてくるのには少々ゲソッとしてしまう。

日本に帰ったらこのニジェール人たちが懐しく思えるでしょう。

篠田節子（ニジェール）





（上）トウモロコシと豆を煮たモゾコイと呼ばれる料理。ケニア東部に住むカンバ族の主食。この写真は学校の給食。
（下）ハウサ語でバラコンと呼ばれる焼肉。ニジェールの街道沿いや市場の露店で売っている。味はいいがゴムのように固い

●そうじのおばちゃん

私の働いている病院の心臓血管検査の部屋に、ひとりのおばちゃんが働いている。

時々、私はおばちゃんの家にごはんを食べに行くことがある。

14～5歳の娘さんがいて、ご主人は娘さんが2歳の時になくなったのだそうだ。今は、親セキでもなんでもない他人の家族と共同生活をしている。

ある日2人で話をしていた。

――ねえ、何歳で結婚したの？

おばちゃん　ん～と12歳かなあ

――え～～～！　子供ができたのは??

おばちゃん　14～5歳だったかなあ……

――……

――ということは、おばちゃん、私とたいして年が違わないわけだ。その時まで私は彼女の年を40歳ぐらいと思いこんでいたのである。なんでこんなにふけて見えるのだろう？　ご主人がなくなって苦労したせいかしら？　これからもずーっと今と同じ生活して行くのかなあ？　と考え質問した、

――ねえ、もう1回結婚してみたら？

おばちゃん　スサキさん、頭おかしいんじゃないの……

――……（無言）

また、違うある日のこと、ごはんをごちそうしていただこうと2人で彼女の家に向かって歩いていた時、彼女が私に言った。

おばちゃん　うちにおしゅうとさんが来ているの、だから、私の仕事の話はしないでね。

そうだ！　看護婦さんだって地位的に低く見られているのに、その下で血のついた術着やシーツを洗ったり、検査で汚れた部屋を掃除するという仕事はこの国でははずかしい仕事なのかもしれない。

刺しゅうが上手で面倒見がよくて、約30歳のこのおねーさん(おばちゃん改め)にはしあわせになってもらいたい。

須崎眞代（バングラデシュ）

●今どき珍しい〝男女別〟プール

マレイシアの中で一番マレイ人が多いといわれているトレンガヌーの町に、11月、新しく市営プールができました。観覧席も広いようで、工事中に外から見ている時は、「フーン、なかなかにィ～」と思っていました。が、ある時、「あれは男女別プールなんだ」と聞き「えっ！今どきそんなのがあるのか、おふろじゃあるまいし」と驚く。

しかし本当だったんですね、これが。先日友人にさそわれ、その家族と行きました。1ドルの入場券を買って入ると、妄勇という看板があり、男女が左右に別れます。まぁ、着がえ場所が別というのは日本も同じなのですが、泳ぐ場所も別だったのです。

マレイ人だらけ、という土地柄だけに、こんなのが出来てもしかたないのかなと思いますが、それにしてもマレイ人のために男女別となったろうに、そのマレイ人は女性の方には泳いでいませんでした。監視のお姉ちゃんと子供が少しだけ。

男性用のプールは、階段状の観覧席があり、屋根はありません。女性用プールは、プールサイドにイスがズラッと並んでいて（白くていいかんじ）陽に焼けないようにとの配慮か、のぞかれないためか少し屋根がついています。男は絶対に何があろうと女性用プールに入れませんが。女は、プールサイドにいるだけならら、男性用プールに入れるそうです。

しかし、プールに入る時はたとえ子供でも水着を着てほしいですね。普通のシャツにパンツはちょっと……そして、いくら泳がなくてもバジュクーロンにトドンでウロウロするな。せっかくの気持ちよさが半減する。

東海岸においでの際は、1度話のたねにこのプール入ってみてはいかがでしょうか？

いなかに住む女の子より（マレイシア）